哲學研究　第四十三號



# ロイスの「意味」

河瀬憲次

„Der Sinn liegt „über" oder „Vor" allem Sein. (Rickert, Zwei Wege. S. 203)

價値を超越的高處に據らしめ、其尊嚴を保持せしめたリッケルトは、かゝる意味の價値が如何にして作用と結合し得るかを充分に說明することが出來ない。價値の論理的探求の過渡段階にあるものと論じた彼の所謂先驗心理學(transzendentale Psychologie)の對象たる當爲(Sollen)は內在的意味(immanenter Sinn)として先驗論理學(transzendentale Logik)より排去せられた理由に依り却つて前揭問題の解釋、卽ち對象の認識(Erkenntnis des gegenstandes)を說く上に獨自の位置を保有しなければならぬこととなつた。

ロイスはリッケルトの價値もしくは意味をば其の超越界より降下せしめ、却て意識に內在するものと觀、此に意味(meaning)を立して實在成立の conditio sine qua non となし、かくの如き意味の特殊化、卽ち具體化を論じて絕對意識を說き、リッケルトにありて全然主觀の彼岸に超越せるものをして人格的經驗の核心たらしめてをる、以下彼の

所謂meaningに就き考察を進めやう。

## 一

凡そ對象の表象に關する最も素朴的なるものは表象を純粹心象よりなるものとする模寫說の立場である。併し表象は決して單なる受働的方面よりのみなるものでなく、能働的なるものである、卽ち對象に對する能働の意識を含んで居る。(aconsciousness of how you propose to act towards the things of which you have ideas. Royce, The world and the individual. I. p. 22)

今前者を表象の外的意味(external meaning)と名くる時後者を其の內的意味(internal meaning)と稱することが出來る。果して斯くのごとく表象は二個の樣相を具へて居るものであるか、前者は寧ろ後者によつて說明さるべく、表象は內外の區別を絕せる唯意味其のものゝ顯現に他ならないものではなからうか。是等の解決は後に讓り、此には唯所論の便宜上二個の樣相を明記して置く。

實在に關する論說中表象の外的意味に立脚せるものは實在論(Realism)であるが果して此は徹底して何等の矛盾を含まないものであらうか。

實在論は對象と表象との間に絶對の獨立を力説するものである、卽ち彼によれば對象は知らるゝと否とに論なく存在する、吾人の夫れに關する意識と謂ふ事實には全然獨立せるものにして何等の交渉を有しないものである。　(That is real which is simply Independent of the mere ideas that relate or that may relate to it. p. 61. p. 117)

多元論を取る實在論に就てみるに此は到底個體間の關係、連絡を求めることが出來ない、其間何等の共通點をも有し得ざることゝなる、(P. 128) 卽ち多くの絶對的に相獨立せる存在を許す實在論は結局其間に不可越の空隙を存置することゝなる。(P. 132) 此に於て實在論は唯一の存在――內的には無限に複雜豐富なると同時に其等總べてが一つの體系に統一綜合せられたる――を肯定する一元論に隱家を求めなければならぬ、併し問題は是にて解決せられない、此に於ては表象と其の對象とは還元することの出來ない極小なる對立である、併も其の本來の主張に基きて兩者は絶對に獨立である以上其の間何等の連絡をも求むることは不可能であり、從つて一致不一致、適不適を許容することも出來ない。　要するに多元論一元論の如何に論なくかゝる表象の外的意味に立脚する實在論の徹底はやがて自家撞着であり、其の世界は絶對無(absolutely nothing)であらねばならぬ。

實在論に對し表象の內的意味のみに立脚し、有限的表象の價値を全然認めないもの卽ち神秘主義(mysticism)がある。神秘主義の主張する實在は絕對的に直接自證の世界である、(absolutely and finally Immediate. P. 61) 有限的表象が常に豫想するごとき對象との對立を絕せる境地であり、凡ゆる努力、欣求、精進の到達點である、斯る對立の存在はやがて意識の存在する所以であるならば必然的に意識は無智を意味する、從つて絕對知は無意識の境地でなければならぬ。(To be possed of absolute knowledge is to be unconscious. P. 191) 今其の所說を通觀するに實在論が獨斷的に實在を以て全然表象以外に獨立せるものと見るのを排する點に於て、更に內省的にして經驗に卽して眞理を規定する點に於て、飽く迄徹底せる經驗論であり、實際的敎說である點に於て、約言すれば實在の基礎を獨自の主觀の內的意味に求むる點に於て遙に實在論に優越して居る。併し問題は依然として橫つて居る。神秘主義の提唱する實在、絕對知とは如何なるものであるか、此は主觀自らが課せる內的意味の究極充足であり、最終到達點である、凡ゆる相對、差別を絕せる境域である、かゝる境地こそ唯一實在である。刻下の意識生活卽ち有限的表象は單なる幻影に過ぎずして全然價値なきものであると主張する。然るに究極充足と謂ひ最終の到達點といふもともに其れに達する

迄の過程を考慮に入れて始めて有意義となり、價値を持ち得るものではないか、恰も數學に於て零が他の數の始源となる點に於て有意味なるも一度零のみ絶對に切り離して考察するに於ては全然無意味のものとなると同じではないか、寂滅は唯吾人が其を求むる限りに於てのみ意味を有し、死は其を求むる點に於てのみ積極的理想たり得、純粹直接(pure immediacy)は表象が體現して居る意味を充足する者なる點に於てのみ內容を有し得る、畢竟神秘主義の高唱する無意識、絶對知の境地は有限的事實と對立し關係することによつてのみ其の意義を獲來ることが出來るものである。然るに斯る相對の立場を排棄し盡くして絶對をのみ高調せんとする神秘主義は自家撞着に陷れるものであつて其の實在もやがてnothingに終らなければならない。

次に批判的主理主義(critical rationalism)の立場がある、此は實在を表象の普遍妥當性や法則等と同一視するものである、卽ち實在とは表象が妥當ならんがために一致しなければならぬ當のものである、表象が依つて以て立つべき類型こそ實在と表象との本質的關係を示して居るものであるとする。(To be real now means, primarily, to be valid, to be true, to be in essence the standard for ideas. P. 202) 從つて實在は表象が規定する經驗の可能なることを保證するものに他ならず、(Their whole esse then consists in their

value as giving warrant and validity to the thoughts that refer to them. P. 209. p. 203)

今此くのごとく主張することによつて前述の實在論が實在を以て全然表象より獨立自存なるものと觀るために陷つた難點を救ふことが出來ると同時に表象を以て實在と全然卽せしめない點に於て實在の獨立性を立することが出來る、卽ち吾人日常の經驗が敎ゆるごとく實在を主觀に對立せる他者として見做す思想を確證して居る、尙又表象を全然迷妄と見做すことに由つて生じた神秘主義の自家撞着よりも脫し得る、要するに實在と表象との關係は全然の獨立と全然の一致との中間に存するもの、實在を以て精神的乃至人格的の者ではないとするのである。(P. 206.) 併ながら此の說も決して終極的のものと見ることは出來ない、問題は依然として殘存して居る。

先づ妥當性(Validity) の意味を考覈して見やう、等しく妥當性といふも經驗の上に具體的に現前するものと未だ具體的に現前せず、單に可能的經驗 (mögliche Erfahrung) の世界に屬するものとの別がある、卽ち確證されたる表象の具する妥當性と到底確證され難き夫の數學的眞理等に現はれたる妥當性との間には峻別さるべき特性がなければならぬ、凡そ經驗は具體的であり、特殊的である、決して一般的、抽象的のもの

ではない、生命に滿ちたるものとして單なる一般的法則とは嚴に區別せられねばならぬ。

於此、表象の有する妥當性を實在と觀る批判的主理主義は必然的に二個の全然相異れる實在を立しなければならぬことゝなる、卽ち一つは個別的(individual)經驗的(empirical)現實的(present)具體的生命(concrete life)の充溢せるものであり、他は之に反して一般的(universal)理想的(ideal)可能的(possible)にして純粹形式(pure form)もしくは單なる一般的法則としての實在である。(P. 261) 此くのごとき全然相異れる二種の實在を同時に許容し得るであらうか。

凡そ表象の外的意味に立脚して實在を立せんとするものは其の根本豫想として必然的に兩者相互間に共通なる或るものを想定しなければならぬ、蓋し全然兩者が無關心であり、獨立せるものである以上自家撞着に陷らなければならぬことは既に述べた通りである。然らば所要の共通なる或るものとは如何。一表象は其の對象の忠實なる模寫ではない、寫眞を欲するものではない、表象の意義は寧ろ其の構成的(constructive)なる點に存する、卽ち選擇し秩序づける能働的方面に存するとするならばかゝる選擇、秩序の原理は如何、其の動力は如何。表象と實在との一致は單なる一

致ではなく、企圖し意志されたる一致(intended agreement)であり、凡ての表象は執意的過程である(Every idea is as much a volitional process as it is an intellectual process. p. 311)

於此眞理を決定する根本要素は意志若くは目的に存することゝなる、斯る意志、目的こそは本節の冒頭に掲げた表象に內在する內的意味に他ならない。此に殆めて實在論、神秘主義、幷に批判的主理主義が闡明せんとして果し得ざりし實在に關する問題を解明すべき唯一の關鍵を把握することが出來る、表象の外的意味は其の內的意味を離れて決して意義あるものでなく、寧ろ內的意味が、發展の途上に於ける一樣相に通ぎない。

The embodied purpose, the internal meaning, of the instant act, is thus a conditio sine qua non for all external meaning and for all truth. (P. 311)

斯く觀來れば外的意味、內的意味と謂ふも既に適當でない、かゝる內外の區別は抽象の所產である、意味其のものの不斷の發展を觀じて始めて具體的に實在に觸れることが出來るであらう。

## 二

意味(Meaning)は二つの樣相を具へて居る、卽ち雜多の統一なる一面を現すとともに一意圖の充足といふ他面を現はして居る。今統一の面を觀るに此れは知識作用(an act of knowledge)を示すものであり、他方意圖の充足なる面は意志作用(an act of will)として觀ることが出來る、而して前者を以て表象の外的意味とし後者を其の內的意味と觀るならば表象の實在に對する關係は、夫の實在論が規定するごとく單なる外的關係もしくは偶然的事實に存するものでなく、必然的內的關係に移植せられ、此に所謂外的意味は其の意義に於て一大轉回を享けなければならぬ。

前に述べたごとくMeaningには意圖の充足といふ意味がある、此に所謂意圖(Purpose)とは表象自らの具する意識的意志(Conscious intent of that idea itself)である。此の關係を詳に考察して見やう。

表象は常に意志の意識を有して居る、換言すれば表象は其が意識せる一意志のある程度に於ける充足もしくは體現である、其の充足もしくは體現は最終のものでなく、從つて絕對特殊もしくは獨自性を有するものでなく、未だ完全なる限定を得ざる相對的の具體化である、意志を離れて表象を考へることは出來ない、意志は表象に內在せるものであると同時に其の本質を形成せるものである、意志充足の一階段こそ

表象の眞の意味である。

The idea is a will seeking its own determination. It is nothing else. (P. 332)

意志は其の究極の具體化を要求し、意味は其の完成を欣求して居る、併も現實なる表象其のものは意志の暫有的部分的、轉變的具體化に過ぎないがために常に表象の指向すべき目標として意志の完全なる具體化の相(スガタ)を揭揚しなければならぬ、斯る目標こそ他者(The other)卽ち表象の對象であるとともに實在に他ならない。約言すれば表象の對象とは表象自らが體現せる意志の完全なる具體化であり、意味の最終限定である。

(The complete content of the idea's own purpose is the only object of which the idea can ever take note. This alone is the other that is sought. P. 329)

實在は與へらるゝものにあらず、求むべきものである、意味卽ち意志なきところには實在は存在しない、實在は意味其のものゝ完成の相に他ならぬ。(P. 445)

意志の絕對充足こそ神の生命であり、絕對意識である、最深最奥の實在である。此くのごとき絕對意識は凡ゆる有限的生命を統一し、彼等に獨自の置位を保持せしめる、此にありては有限的生命は自己獨自の價値を把握しつゝ絕對生命に參すること

を得る、凡ゆる有限的表象は其が相對的斷片的暫有的に體現せる意志を失ふことなく絶對の裡に統一せられる、斯る意味の絶對は個體を呑噬(absorb)するものにあらず、却つて安住の地を與ふるものである、かくて努力、蹉跌、過誤、制限、之等を具有する有限的意識は依然として絶對意識の裡に存在する、絶對と相對、一と多との關係は全く有機的である。(P. 427. P. 464)

懷疑論者は唯經驗的意識に現前せる暫有的のもののみを主張して神的生命、絶對意識を拒否するかも知れぬ。併し彼は經驗的意識を絶對と見ることに於て既に絶對意識を獲取して居るではないか、もし飽迄經驗的意識の暫有的なるを主張するならば此のことが當然暫有的以外のあるものを豫想して居る證左である、卽ち自家撞着に陷るかもしくは暗默の裡に絶對意識の實在を豫想することなくして到底懷疑論者たり得ない。(P. 369—372)

前述せる實在論、神秘主義、幷に批判的主理主義に對し表象體系の全意味を完成せる經驗の上に現前せしむるものこそ實在であると主張する立場を第四の立場と稱することが出來る。

於此第四の立場に對する犀利なる批判の鋒は先づ其の標示する意味卽ち意志の

考察に向けられなければならぬ。

凡そ意志を以て實在成立の根本條件となす場合意志をば實在の原因卽ち a causally efficacious entity と解し、自然力の一と同視する誤謬に陷り易い、併し原因或は自然力と謂へば既に實在を豫想して居る、從つて其が實在を闡明すべき原理となることは到底不可能である、かゝる概念は形而上學的と謂んよりは寧ろ宇宙論的である、之を要するに第四の立場に於ける意志は心理學的のものでなくまた生成的の意味に於て實在成立の條件となるものではない、其は飽迄論理的の意味でなければならぬ。

次に此の第四の立場と實在論、神秘主義、批判的主理主義との關係を一瞥しやう。

凡そ對象と表象とは全然同一なるものにあらずして對象は表象が依つて以て存しなければならぬ或るものであると謂ふ意識がある、そこで實在論は既述した通り對象を以て表象より全然獨立なるものと主張することによつて對象が表象に及す一種の權威、威壓的態度を抽象的に說明せんとして居る、併もかゝる主張其のものゝために自家撞着に陷れることは既に明にしたところである。然るに第四の立場よりする時は實在卽ち對象は表象に內在する意志に依つて求められ、欣求せらるべきもので決して上より與へらるべきものではない、其の間係は外的でなくして內的で

ある、併も常に思慕精進の目標として表象は不斷に對象に對して自律的服從を欲する、對象は常に表象に一種の權威を持して臨んで居る(P. 353) 斯く觀ることに依つて實在論の難點を免れつゝも其の說かんとせるところを遺憾なく說明し得る。

神秘主義は實在を直接自證の境地に於て吾自らの裡に、求めんとする併も同時に有限的表象の價値を否定することにより免るべからざる難關に逢着した。今第四の立場は實在を以て表象に內在する意志の最終の體現であると見做す點に於て其は吾自らの裡に見出さるべきものである、同時に有限的表象も縱令暫有的轉變的であつても意志の或る程度の體現たる點に於て其の獨自の價値と意味とを認容するが故に、神秘主義の難問を突破することが出來る。(P. 355)

最後に批判的主理主義は實在を以て表象の普遍妥當性と同一視し、一切經驗の法則、類形乃至形式等と同一に見做して居る。於此妥當性に關する二重の意味を生し、從つて同時に相異れる二種の實在を想定しなければならぬ破目となり、此に矛盾に陷つた。第四の立場は實在を以て表象に妥當性を賦與するものと見ることに依り批判的主理主義の主張に同ずるも、其の妥當性の意味に於て大に異る。此は意志の最終實現を意味するものなるが故に決して單なる普遍、形式等とは趣を異にし、完全

なる特殊性を具し、具體的內容でなければならぬ、眞に unique のものであり、潑溂たる生命でなければならぬ、カントの所謂 mögliche Erfahrung の世界とは全然相異れるものである。

斯くのごとく實在に關する第四の見解は如上三個の見解の綜合であるとともに其等各々が陷れる難點を巧みに離脫し得る見解と謂はなければならぬ。然るに此に一の問題が隱れて居る、卽ち現實の經驗的意識は夫れ夫れの段階に於て意志の充足を意味し、相對的眞理を把握して居るものであるならば如何にして誤謬の存在を認容することが出來るか、此は不可解とならないであらうか。

第四の立場によれば、吾人の有限的、暫有的意識は意志の全內容を含み得ないと同時に、意志其のものの明確なる意識をすら爲し得ない場合がある、卽ち「余は何を求むるや」、「余が眞に意志するところのものは何か」等の問題に對して往々誤れる解答を施す、此に誤謬の可能なる所以が存在して居るのである、換言すれば誤謬の生起する原因は、意志實現の過程に於て斯かる目的意圖を充分に意識せない點に存在する。

The principal source of actual error, in finite consciousness, we have already found to be the indetermination of our purpose at any stage in that realization. (P. 448)

意志實現の不斷の過程、そこには惱みもあれば悲みもあらう、悲劇の種々なる相が現前するであらう、併も其れ等あるが故にこそ意志は卽ち意味は寔に鮮明なる姿を取り、熾烈なる憧憬の炎にまかれつゝ有限的意識に上り得る、實在はかくて無限の過程に於て歩一歩完成の域に近づく、一切を統一し、一切に其の據處を與ふる絕對無限の生命裡に惱めるもの、悲めるもの夫れ夫れに獨自の位置を保有しつゝ神の意識に參して居る。

## 三

以上ロイスの思想を概說し、實在は畢竟意志目的の完全なる充足に他ならずとする彼の所謂實在に關する第四の見解を敍說した。

實在成立の根本條件として意味を揭揚せる彼に取りて知識過程はやがて執意過程に他ならぬ、宇宙の根本的構成は目的論的、意識的である、(In so far as the fundamental structure of the universe is essentially both teleological and conscious. P. 432) 從つて表象の能働的方面を高調し、理論的作用を實踐的作用に還元せんと努むる點に於てウィンデルバンド、リッケルト等の論理主義と契合するところあり、ジェームスの實用主義と吻合す

るところもある、以下是等の思想と照合しつゝ批判を進めやう。

カントは感覺的內容を時間空間の形式によりて統一せるものを經驗的直觀(empirische Anschauung)或は知覺(Wahrnehmung)とし更に是を範疇(悟性の形式)に依つて統一せるものを經驗卽ち認識として居る、而して範疇の營む統一作用の根抵に個我の奧深く貫流して居る自覺の意識、卽ち先驗的統覺もしくは純粹統覺を立して居る、(Kant, Kritik der reinen Vernunft. S. 121)卽ちカントは「我」の裡に於ける超個人我として意識一般を規定し、之を以て必然普遍妥當的認識の根據となした。

ウィンデルバンドは認識可能の根據を規範意識(Normalbewusstsein)に置き、哲學を以て規範意識に關する學なりと論定して居る、(Präludien. S. 45)併し規範を以て他の總ての精神現象と同樣に心的要素が自然必然的(naturnotwendig)合法則的に結合して生ぜる無數の結合形式の裡より眞理目的(Zweck der Wahrheit)もしくは Der Wille zur Wahrheit に依つて選擇し出されたる一定の形式、換言すれば自然法の種々なる現はれ方の格段なる形式に過ぎないものと斷じて居る。(Präludien, II. S. 72—73)從つてかかる意味に於ける規範の超越性は眞理意志を有する限り如何なる個體的主觀にも妥當なりとの意味に於て超越的である。然るにリッケルトにありては其の Gegenst

and der Erkenntnis に於て論理主義徹底の度を進めて認識可能の根據をば最根本の主觀卽ち意識一般をも超越せる當爲(Sollen)にありとなし、カント、ヴィンデルバンドに存せる見逃し難き心理學的因子の混在を排去し盡くさうとして居る。更に「認識論の二途」(Zwei Wege der Erkenntnistheorie) に於ては斯る超越的當爲は判斷必然性の感情より見出されたるものであるとなし、今純粹に感情のみの分析より感情以上の或るものを見出すことは不可能である、是がためには既に根本豫想として認識の超越的對象を隱約の裡に措定しなければならぬ。今斯る超越的對象其のものを直接に論究し、主觀に毫も關係することなく超越的 (das Transzendente) を純粹に把握するものを先驗論理學であるとなし、當爲の如きは內在的意味に過ぎずして眞の超越的は意味 (Sinn) もしくは價値 (Wert) でなければならぬと論じて居る、從つて價値は主觀とは全然沒交涉に其の超越性を確保して居る、價値は凡ゆる實在の「前に」及び「超へて」存し、實在は唯價値に依憑してのみ始めて可能となる、併しながら斯る論結に對して當然提起さるべき問題は、斯く主觀を全然超越せる價値が如何にして認識に於ては主觀と交涉し得るに到るか、約言すれば認識に於ける主觀と價値との結合問題である。

リッケルトは超越的なる認識の對象を求むるための過程として主觀の意義を認識

論上如何に限定すべきかを考察し、終に如何にしても意識內容となり得ざる限界概念としての意識一般を以て認識論的主觀となした。併も他面かゝる實體なき限界概念としての主觀をば肯定又は否定する主觀(bejahende od. verneinende subjekt) と呼び或は判斷意識一般と名け、常に超越的對象を是認する作用を有し得るものとなし、或は又主觀の概念は客觀の夫れを離れては何等の意義をも有し得ない等とも論じて居る、今單に限界概念としてのみ考察せられた認識論的主觀が如何にしてかゝる具體的活躍を爲すかを說明するとが出來るか、換言すれば如何にしてかゝる意味の主觀其のものが活き活きとせる事實の構成に參し得るか、蓋し此はリッケルトの所說に對して必然的に提起せらるべき問題である、此の際辿るべき唯一の解決の途は直接經驗の事實卽ち彼の所謂先概念的 (das Vorbegriffliche) なる統一其のものに歸つてゆくことでなければならぬ。先概念的の世界とは取りも直さず主觀客觀の別を絕せる境地、卽ち主觀と客觀とが合一融合せる境地である、從つてかゝる境地に歸入することによりて純主觀を握り、其が活潑々地活動的のものなることを理會することが出來る、只かゝる自證的統一の體驗を反省する刻下に其の統一は破られ、此に明證感情(Evidenzgefühl) によつて告知せらるゝ超越的當爲及び是を是認する主觀との二者

に分かたれるに到る。然るにリッケルトはかくの如き區別せられたる統一換言すれば認識主觀と認識の對象との對立境より出發して以て兩者を徹底的に考究しやうとするものであるから終には對象とは何等主觀に關係を有せざる價値もしくは意味となり、從つて斯る對象に對應する主觀とは單に限界概念を意味するに過ぎないものとなるに到つた。けれども今若し根源的に是を觀るならば其の實、主觀は具體的直接經驗の事實に基いて居るものであるから活き活きとせる主觀であり、働きつつある主觀である、從つて主觀のかゝる本質的原本的性質は如何程抽象を逞しくし分析を徹底せしめても尙全然取り去ることが出來ないであらう。於此リッケルトが主觀をば單に限界概念として見つゝも尙單に實體なき、力なきものとせず、肯定否定の作用を營み得るものと見做すに到つた矛盾を能く理會することが出來ると思ふ、卽ち先概念的の世界をば暗默の間に其の認識論に移入し、其の豫想として重大なる契機を構成せしめて居るものであらう。

此の點に關しロイスの意味(meaning)の概念は重大なる論理的意義を齎すこととなる、卽ち彼にありては意味は常に意志と密接不離の關係に立つて居る、意味は目的、意志の意識を離れては存在し得ない、此は常に意志作用に內在して居る、從つて意志

と意味との關係は全然內的でなければならぬ、對象卽ち最も獨自の相に於て現はれたる意味は認識主觀に對し何等超越的のものではなく、外的關係に立つものでない、唯現前せる意志充足のより一層高き完成として現實の意識により欣求せられ、揭揚せられ、現實の意識が達成すべき理想として自律的服從を欲するものであり、兩者の關係は全然本質的である。要するにリッケルトの所謂先驗論理學に於て、全然其の統一を破壞されたる主觀と對象とはロイスによりて實在の意識の裡に統一せられたと見ることが出來るであらう。

斯くてリッケルトが意味或は價値を全然主觀に超越的なるものと斷ずることによつて逢着せる難關をば回避し得るごとく思はれる。併し問題は猶殘つてゐる。

前に說いた如く彼にありては意味は意志に內在して居ると同時に意志の指向すべき對象として意志に對立して居る、彼が切言せる如く此の場合意志は決して實在の原因として考へられるごときものでない、原因なる概念は形而上學の問題にあらずして宇宙論の問題である、從つて又決して心理學的のものでもない、此に所謂意志は凡ゆる實在成立の根本條件としての意志である。

併し意志は常に動的のものである、卽ち其に內在する意味を限定しゆくものであ

る、而して此の意味の相對的限定こそ暫有的有限的なる現實の經驗に他ならずとするならば此に說く意味の限定とは如何。彼に從へば凡そ限定と云ふ概念は二つの面を有する、卽ち純粹ならんがために雜物を排拒する一面と他面含まるべき總べてのものを漏れなく包容することである、排拒と包容とである、而して斯る二面が完全に體現せられたところに獨一無二なる特殊性(individuality)が現れ、是れやがて實在に他ならない、實在は決して類型若くは形式ではない。斯く主張することによつて彼は飽迄カントの möglichе Erfahrung を實在とする批判的主理主義に反抗して居ることは彼の思想を略述した際に述べたところである、從つて彼によれば意味の相對的限定たる經驗も亦相對的特殊でなければならぬ。

斯く意志を限定作用と見るとき必然的に作用せらるゝものを豫想しなければならぬ、此に該作用の行はるべき資料如何といふ問題が起る。彼に依れば其は意味の一層低度にある充足、意志作用の一層低度にある限定、換言すれば一層實在より遠かれる表象である。今此の關係を下に推進せしめて終に其の極限に達することが出來る、併し此は表象作用卽ち思考に取つては限界概念である、此の境地は表象未分の域、思惟未動の境である。

今表象に內在する意味より出發して實在を說明せんとせる彼に取りては實在の構成は全然目的論的(teleological)且意識的(conscious)でなければならぬ、併し表象對象の相對的統一を說く彼は其絕對的統一である根源に歸つて始めて其の全體系に意義を獲來ることが出來ないか、實在を徹底的に論述せんためには其の根源の問題は重要なる部門たらざるを得ないであらう、卽ち彼にありても常に前述のごとき表象對象未分の域に歸入することに依つて益々實在の豐富を解き得るものではなからうか。斯く謂へば彼は下のごとくに駁擊するかも知れない、卽ち實在を論ずるに當りては飽くまで種々の假定豫想を排斥し唯直接自證なる犯し難き經驗的事實よりしてのみ出發して始めて徹底することが出來る、然るに吾人の直接意識は唯對象と表象との相對的統一を敎ゆるのみである、經驗論者として飽く迄經驗に忠實なる限り余は一切の他の言說に耳を蔽はざるを得ずと。斯くの如き用意は蓋し實在を徹底的に論究せんとするものゝ避くべからざるところである、併し彼は經驗其のものの意義を充分に把握して居たであらうか、ジェームスが其の「根本的經驗論」(radical Empiricism)に於て或はリッケルトが「認識の對象」に於て論ぜるごとく經驗論が依つても

つて出發點となし、根本豫想となし、意識の直接事實とする經驗其のものが其の實決

して直接的でなく却つて間接的であり、加工せられたものである場合が多い、眞に直接自證の經驗の事實とはジェームスが謂つたごとき純粹經驗卽ち主觀もなく又客觀もなく唯あるものとては名狀し難き活動夫れ自身であり、simple that のみである狀態、併も其の中に主觀客觀、能知所知が潛在的に包擁せられ認識の自發的顯現を包藏して居る狀態ではなからうか。(James, Essay in radical empiricism. P. 23) 於此リッケルトに取つて不可避の隱家たる das Vorbegriffliche はロイスの體系に於ても重大なる意義を齎さないか、意味の內在を說きてリッケルトの意味に人格的血脈を賦與し得たるロイスも意味を論ずることによつて未だ實在の本源(Ursprung)を明にしない怨がある。

## 九

ウィンデルバンドにありては眞理意志なき者は哲學に取りて無緣の衆生に過ぎない、是と等しくロイスにありても目的論的に實在を說く點よりして意志が決定的契機であることは嚮に縷述した處である、此の點に於て實用主義とも密接なる連關を有して居ると謂はねばならぬ、以下概略其の點を考察せう、實用主義といふも此には

專らジェームスのPragmatismによることを斷つて置く。

彼の根本的經驗論の必然の結論として凡ゆる實在は總べて經驗的であり、超驗的のものは到底承認すべからざるものとなる、從つて思惟作用も亦夫れ自らに獨存する(an sich existierende) 何等かの秩序其のものを發見すると謂ふ意味は毫も存しない、能知所知ともに內在的であり、表象又は概念の指示すべき實在は決して超越的でない、眞理の本質的要素はverifying processesであり、其の標準は現實の人間生活に有要なる點に存しなければならぬことゝなつた。(Pragmatism, P. 204) 併し是が果して眞理論に關する最後の言葉であらうか。凡そ有要といふ概念は要求實現の可能を示すものである、從つて此は同時に要求の概念を伴つて居る、而してジェームスは之を心理學的のものに解して居る、例ば個人に對して、もしくは個人の集團たる國家社會もしくは人類の生活に對して有要といふが如きである、而して眞理に對して本務の感や畏敬の念を抱くはかく眞理が有要なるがためであると論じて居る。(P. 232)

併し此はリッケルトが痛論して居るごとく多くの人々の眞理に對して有する關係と眞理其のものとを混同することから起つて居る謬見である、吾人が眞理の前に跪坐する時一切の有要感を離れて絕對的なる自律的服從を强迫せらるゝが故に服從

するものである、手段としての眞理を畏敬するにあらずして眞理其のものを目的として畏敬するのである、實用主義の立場よりしては此の點を說明することは到底出來ない。

實用主義は眞理の動的にして相對的主觀的であることを主張して居る、勿論前時代に於て眞理とせられたことが後代學問の進步や經驗の擴大につれて改修せらるごとき事實の存在するは否みがたい、斯る點に於て眞理は飽く迄動的であり發展的である、併し其の故を以て直に眞理其のものを相對的とすることは斷じて不可である、相對論はこれを徹底するとき自殺に終るものである、かゝる論者は眞理の外面を觀て直に其の內面にも言及したものである、假令具體的事實としての眞理其のものは相對的轉變的であるにしても其の內面的必然性を考察するとき眞理は絕對性と普遍妥當性とを要求して居ることを知る、恰も個々の具體的事實として外面に表はれたる道德法其のものは轉變的であり相對的であつても道德法の內面に潛んで其の基礎となり、本質となつて居る道德性は絕對的であり普遍妥當的であると等しく、具體的事實としての眞理は相對的であるも眞理價値は絕對的であり、普遍妥當的であらねばならぬ。眞理の相對性を主張する Pragmatism は斯る眞理價値の絕對的

に妥當なることを默認しつゝ敢て閑却せうと努めて居るものである、蓋し何等かを主張せんとする人は既に眞理の絶對性を豫想して居なければならないから、徹底的相對論は自殺に終る他ないからである。

實用主義は眞理其のものを人間の實生活と密接なる關係に持ち來したといふ長所を備へて居るが其所謂生活とは果して如何なる意味であるか。今生活の意味を究明することによつて實用主義の不徹底點を指示することが出來る。先づ生活を精神生活(spiritual life)の意味に取る、精神生活とは理想を追求する生活である、現實と理想との鬪爭の生活である、而してかゝる生活を指導してゆく理想とは眞善美の謂である、然る時は眞理とはかゝる理想生活と交渉を有するもの、換言すれば眞理は眞理と交渉關係を有し、卽ち眞理の爲めの眞理となり、實用主義本來の思想と相牴觸するに到る。然らば生活の意義を物質生活(bodily life)の意とするならば如何、物質生活の擴大は決して人間の生活を擴大することと同一であると謂へない、スペンサーに依れば物質生活の擴大とは生活の breadth と length との擴大を意味するものであるが吾人は更に depth の擴大を要求して居る、併も前二者に比してより一層本質的の要素をなして居る、かくして始めて人間の生活が擴大せられて行くのである、然る

に前のごとく解決せられた眞理はかゝる生活の深さを擴大する事に對して意味を有しない、實用主義の眞理は從つて人間生活其のものに有要であると謂へなくなるではないか。

之を要するに實用主義の眞理觀の基礎を爲して居る要求の概念は全然心理學的である、卽ち個人的(individual)もしくは社會的(social)要求である。今ロイスは有限的意識に現前する個人意志に對して神の意志、絕對意志もしくは神的意志を立して居る、個人意志は神的意志の一時的顯現に他ならない、(P. 464)從つて相對的特殊相を具して居る、彼等は自個破滅に終ることなく其の特殊性獨自性を保有しつゝ神的意志に統一せられると同時に神的意志は是等多數の個人意志によりて始めて其獨自性を獲得することが出來る、恰もシェークスピーアの各劇中の人物が各自其個性を具しつゝ一シェークスピーアに統一せられるとともにシェークスピーアの個性は却つて是等の描出されたる人物によりて始めて潑溂たると同樣である。斯くのごとく彼は神的意志を立し而して是を人間の意志目的より高次的のものと見做すことによつて實用主義が陷れる前揭の諸難點を離脫し得るやうに見える。併し此に彼の思想に於ける難關が發見されないであらうか。今彼が絕對意志を立するに到つた思索

の過程を考察して見やう。自ら經驗論者――假令經驗の意味がジェームスやベルグソンの如く徹底的でないにしても――であることを標榜して居る彼は、自己の經驗の事實を考察する事によつて其の諸事實間に統一の嚴存することを知る、彼の意志と他の個人の意志との相互間に於ける不可徹入を感ずる、今自己の經驗事實間に於ける統一の意識を擴充して是を多數の個人的意志間の事實に及し、更に宇宙全體に擴充して此に絶對意志の概念を獲來つたものゝ如くに解せらる、卽ち其の思索は類推に基いて居る、併もかくして立せられたる絶對意志と個人意志との關係を論ずるに當つては飽迄論理的である、唯一意味の無限の發展あるのみとなり、彼に取つて世界の統一は One thing と many things との關係でなく、全然意識の統一である、(The unity of the world is the unity of consciousness. P. 466) 於此唯一意味、卽ち神的意志より出發せんとするならば個人的意志のごとき其の單なる一樣相として派生的のものである、今もし直接經驗の事實としての個人的意識から實在の成立を論ぜんとするならば其の到底不可能なるは個人意識といふがごときものが果して直接意識の事實なるや否やを考察することによつて明瞭になるであらう。然るに嚮に述べた如く彼の思索が類推の上に立つてゐるが故であるか兩者の區別徹底的ならず其混同を敢てし

て居るやうに見える。殊に其の顯著なる事例を誤謬の由來に關する說明中に見出すことが出來る。既述の如く彼によれば誤謬の生起する原因は執意的過程の中途に於て目的の意識が明確ならざるにありとして居る、於此問題となるはアリオッタも論じて居るごとく斯る目的の明確なる意識なくして如何にして執意的過程が存し得るかといふことである、意志するところを知らずして意志するごときことが有り得るであらうか、自分の眞の意味を知らざる表象に取りてかゝる意味が內在するであらうか、寧ろ個人の有する表象が指向すべき意味は決して個人的意志に依憑するものでなく高次的なる絕對意志に內在するものでなからうか。認識作用は單なる個人の執意作用と本質的に峻別さるべき或るものを有して居ないだらうか。

（八、九、五）